



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	一人職場で働く図書館員の“持ち場”はどこまでか：北海道大学北キャンパス図書室の場合
Author(s)	千葉, 浩之
Citation	大学の図書館, 37(9), 124-126
Issue Date	2018-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/71761
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	article
File Information	tk_37_9_124.pdf



.....
特集：秘境、一人職場の実情！

一人職場で働く図書館員の“持ち場” はどこまでか ―北海道大学北キャン パス図書室の場合―

千葉 浩之

.....
はじめに

「わざわざいらしたのに会えなかった？
本当にすみません。でもそれはこの図書室に
とってよい兆候で、一人でじっと座っている
よりもずっと生産的なのです。」

一人職場の図書室に勤めて1年半。不在時
に図書室を訪れた同僚や上司に私はこんなこ
とを言う。“持ち場”を離れておいてと訝し
がる向きもあるだろう。この場を借りて釈明
してみたい。

1. 北海道大学北キャンパス図書室

北海道大学札幌キャンパス。その北端、研
究所・センターが集まる北キャンパスエリア。
電子科学研究所の1階に北キャンパス図書室
がある。

2017年4月に出向先の室蘭工業大学から

戻って、ここに配属となった。定員は1。一
人職場は初めてだ。

この図書室は電子科学研究所と触媒科学研
究所の資料、約21,000冊を所蔵し、両研究
所に加えて北極域研究センターの図書業務も
担う。奉仕対象には創成研究機構（研究を掌
る全学的な組織）の構成員やURAも含まれ、
あわせると500名弱になる。

仕事は貸出からILL、蔵書点検まで多岐に
わたる（発注、受入、目録は中央館が担う）が、
量はかなり少ない。1日の入室者はのべ10名。
窓口での貸出は週に2冊。

2. サービスモデルの転換

利用の少なさはやはり資料の電子化に起因
するのだろう。研究室にしながら電子ジャー
ナルにアクセスでき、蔵書の購入も減った状
況にあって、明らかに「待ち」のサービスモ
デルが限界に達している。

さて、どうすればよいか。一人職場なので、
まずは一人で打開策を考えねばならない。そ
れに自分自身が職業を通してどうありたいか
にも直結する問題でもある。

とはいえ、実際は着任前に自嘲混じりの引
き継ぎを受けた時点で、進むべき道は情報リ
テラシー教育（研究者相手に「教育」はおこ

がましいが)の高度化・多角化だろうと考えていた。この着想は数年前のフィンランド出張で得たものだ¹⁾。論文検索はもとより文献管理、引用情報による論文やジャーナルの評価、学術情報流通の最新動向などなど。研究者にとって有益な情報はかなりの量になりそうだ。

もちろん一人で学術情報まわりの知識を身に付けるのは難しい。だが、ここで肝心なのは、たとえ一人職場であっても学術情報サービスのネットワークの中にいるという意識だ。学内には同僚の図書館員がいる。ウェブからは他大学の先行事例を含め、各種情報を入手できる。大学図書館問題研究会もネットワークのひとつだ。頼りきりにするのは問題だが、教わり、学びとる環境は整っている。

また、この図書室はWi-Fiこそ走っていないが、講習会を開ける広さの閲覧コーナーがある。白い壁はスクリーンにうってつけた。

3. “持ち場”の拡張

構想を実現するには周囲の理解を得て、ニーズを掴む必要がある。正直なところ着任後数か月は見通しが立たずに腐っていたが、それすら厭きてきた。資料を作って、まずは所属先である附属図書館の上司に、次に現場の部局事務長に、実情と新たな方策を伝え、了承をいただいた。

ニーズの把握にあたっては、本来の“持ち場”の図書室にいてもほとんど研究者に会えないので、外に出る必要がある。

部局内の懇親企画は親睦を深める以上にニーズを訊く大切な機会だ。図書室の話はそこそこで、研究活動の文脈で学術情報サービスが関われそうな話題を意識した。論文はどう入手しているか。データベースは何を使っているか。学生の指導はどうか。また、具体的に自分が得意とすることは話が弾み、展開も期待できる。逆に要因は何であれ、できないことはいくら列举しても何も進まない。

業務時間内であれば「おつかい」系の仕事も大事な接点となる。渡すべきものをメールボックスに入れて終わりではなく、できるだけ直接出向く。対面することでお互い用事以外の何かを思い付くことがある。

英語による各種サポートが簡単なもので(も)よいと知ったのも研究室への「おつかい」のついでだ。奉仕対象に占めるアジア系の留学生の割合は無視できないが、彼らにとっても英語は外国語だと教員から指摘を受けて気楽になった。図書室のサインを日英併記とし、単純なものは英語だけにした。後述の主催講習会は日本語に加えて、言い訳がましいが「very simple English」でも行っている。

廊下、食堂などなど。図書室の外にチャンスは転がっている。「何でもやります」ではなく、声をかける(逆にかけられる)だけの具体的なネタを持つておくのが肝要だ。

4. 学術情報サービスをかたちに

こうして図書室の外で集めたニーズを咀嚼し、周囲の助けを得ながら、できそうなことから始めてみた。以下に列举してみたい。

2017年10月、附属図書館が定期的に講師を招いて開催しているSciFinderとReaxysの講習会を北キャンパスに初めて誘致してみた。特に前者は奉仕対象の研究者に馴染み深い。近隣施設には講習用のPCルームがないが、Wi-Fi対応の部屋を借り、参加者にPCを持参してもらった。集客上の成否は微妙だが、続けてみる価値はありそうだ。

2017年11月、研究者向けイベント内の一企画として「業績評価指標の仕組みと調べ方: Top10%論文を中心に」なるレクチャーを行った。直接はイベント共催者のURAから打診を受けたものだが、前任地で論文業績評価に取り組んだ経験があったので、かねてより方々に喧伝していた。一回限りのレクチャーだが、作成した資料は論文の位置を知るマニュアルとして学内で再利用されている。

2018 年 4 月から 5 月にかけて「北キャンパス図書室 オンデマンドガイダンス」を図書室内で開催した。図書室の使い方に加え、論文検索や文献管理といったトピックを複数用意し、ウェブから日時とトピックを選んで申し込んでもらう。希望日時は分散するので規模的に一人で十分対応できる。結果的に学生を中心に 31 名（8 回）の参加を得た。6 月以降も申し込みを常時受け付けている。

2018 年 7 月、「午後の講座：インパクトファクターと論文へのアクセス改善」を図書室内で開催した。学内でインパクトファクターが話題になった時期にあわせて企画したもので、オープンアクセスの話や Google Scholar ボタン、Kopernio などの紹介も行った。教職員を中心に 15 名（4 回）の参加があった。

上記のイベントの自作資料はいずれもウェブで公開しており、CCBY ということにしている。鍵括弧内のタイトルで検索いただくと見つかるだろう。学術情報サービスのネットワークへ還流できれば嬉しい。

おわりに

一人であっても物理空間上の“持ち場”に囚われずに、研究活動の文脈に自らを位置付け、サービスを展開する。その先にこそ、この利用の少ない図書室が“日常的に研究者が立ち寄って学術情報まわりの相談ができる場”へと進化しようと考えている。

- 1) 千葉浩之. “E1512-フィンランドの大学図書室：情報リテラシー教育をめぐる挑戦”. <http://current.ndl.go.jp/e1512>. (参照 2018-08-27).

(ちば・ひろゆき／

北海道大学北キャンパス図書室)